

治罪法全訓集第十一卷

同法省記錄文庫
第五百七十號
第十四冊

第五號
第一架
第六

司法省
第九號
寄贈圖書文庫

司法省記錄文庫
第一一號

XB 620
T 6
8 K

輕罪公判

第四編、三



XB 620	
T	6
8	K

司
法
省

私前始審裁判所判事

十五年三月一日詔訓
全年全月廿五日

第三章 輕罪公判

第一條 明治十四年第五十四號公布ニ基キ

第三百四十七條 輕罪

安裁判所ノ豫審ヲ要セスト者認メ公判ヲ求メ

裁判所ニ於テハ左ノ條

未リ候処警察官ニ於テ拘留狀ヲ發シ已ニ狀應

件ニ因テ公訴ヲ受理ス

ノ後ハ九日ヲ經過シ求刑シ未リ警察官ニ於テ

一檢察官ノ請求ニ因リ

ハ豫審ヲ要セスト者認メ猶公判ニ於テ審

書記局ヨリ被告人ニ

伺テ遂ケル処豫審ヲ要スルモノト者認メ或ハ

對シ發シタル呼出狀

豫審ヲ要セサル者アリト雖モ審理中祭日休日

ニ豫審判事輕罪裁判所

等之ニ有リ拘留期限ヲ經過セントスルモノ下

會議局又ハ上等ノ裁

ル中公判各事ニ於テ收監狀ニ換ヘキ成規無之

判所ノ判決ニ因リ其

ナリトテ輕罪ト至トモ逃亡ノ恐アル力又ハ無

事ニ移スノ言渡

宿者等ニテ釋放ナシ難キ場合ハ如何処分シ可

然哉

右ハ左ノ通

内訓

第一條 公利々事ニ於テ收監状ヲ發スルコトヲ
得可シ

第二條 前條ノ如ク治安裁判所ニ於テ豫審ヲ
要スルモノト者認メ候節ハ其旨ヲ被告人ノ言
渡シ捕原告官ニ通知シ一切ノ書類ハ原告官ニ
還付スルキニ止メ可然哉

右ハ左ノ通

内訓

第二條 諸訓意見ノ通但治罪法第三百五十一
條及ヒ第三百五十七條第一項ノ規則アルヲ以
テ豫審ヲ終サレハ公利々事ニ難キ場合ハ甚ク

第五十四條 明治十四年十月十六日

刑法治罪法實施ノ儀布

告候ニ付テハ當分ノ内
輕罪ニシテ檢察官ニ於

テ豫審ヲ要セスト見
ルモノニ限り始審裁判
所在ノ地ヲ除クノ外治
安裁判所ニ於テ輕罪裁
判所ヲ開キ其裁判ヲ為
スルヲ得一ニ此旨布告
候事

但本文ノ場合ニ於テ
訟廷内治罪ノ手續ハ

稀ナル可シ

山形始審裁判所檢察事

十五年青書諸訓
元年六月二日内訓

第一條 治罪法第三百四十七條公訴受理

ノ規定タル第一ノ場合ハ檢察官ノ請

求ニ因リ書記局ヨリ被告人ハ對シ発シタ

ル呼出状トアリ其手續タルヤ檢察官

ヨリ公訴書類ニ被告人呼出請求書ヲ

添ヘ書記局ニ送付シ同局ハ其請求ニ

由テ呼出状ヲ発シ始テ公訴ヲ受理シ

判官ノ管掌ニ歸スルモノナル可シ果シ

テ然ラハ書記局へ呼出シノ請求ト俱

ニ始審裁判所長へ宛公訴書類ヲ

回付スルノ謂シ無之相考候得共

便宜可取計且其

手續上ニ付テハ上

訴ヲ許サス

如何可有之哉

右審按候如第一條治罪法三百四十
七條第一項檢察官ノ請求ニ因リ云
々トハ檢察官ヨリ直チニ公判ヲ求ム
ル場合ヲ示シタル者ニシテ本項ノ
意ハ檢察官ヨリ裁判所長ニ請求ニ
當該判事ヨリ書記ニ命シ呼出
状ヲ發セシタル中ノ事ヲ謂フ
者ト考量候ニ付左ノ通

内訓

第一條 治罪法第三百四十七條第一
項檢察官ノ請求ニ因リ云々ハ檢察
官ヨリ訴訟書類ヲ裁判所ニ回付ニ當

該判事ヨリ書記ニ命シ呼出状ヲ
發セシムル儀ト心得可シ

第二條 其第一ノ場合ハ豫審判事
輕罪裁判所會議局又ハ上等ノ裁判
所ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡
ハアリ其手續仮令ハ當輕罪裁判所
豫審判事ノ同裁判所ニ移スノ言渡
ニテ其訴訟書類ハ書記局ニ領置ニ言
渡確定ノ上受理シテ始テ公判ノ事
ノ管掌ニ歸スルモノナルヘシ取テ豫審
言渡確定ノ上一旦檢察官ノ手歸
シ又公訴ノ為メ訴訟書類ヲ判事
ニ回付スルモノニ非スト存候得共如何

有之哉

右審梅候延第ニ條全法第三百四十
七條第二項豫審判事云々事件
シ後エノ言渡トハ一応之ヲ詢スレハ
豫審判事ノ事件ヲ後スノ言
渡ノミヒテ^{別段檢察官}ニ於テ之シニ
関涉セズ直テニ公判ノ事ニ於テ
裁判ス可キ様是フルト雖モ治罪
法第三十四條ノ原則ニ依リ檢察
官ノ經由シテ公判ノ事ニ付ス可
キ^考考量候ニ付

左ノ通

内訓

第二條 全法第三百四十七條第
二項豫審判事云々事件ヲ移ス
ノ言渡確定シタル後之ヲ公判ニ
付スルハ檢察官ノ手ヲ經由スル儀
ト心得ヘシ

新瀉裁判所新差田支廳詰檢事 去年九月七日請訓
十五年正月十日訓

第二十四條 治罪法第三百四十七條若シ

公訴事件ニ付テハ被告人之ヲ不服
トシ控訴ヲ為サントシ民事原告人ハ
要償ノ點ニ付テ不服アリトシ又控
訴ヲ為サントスル時ニ第三百三十九
條ノ規則ニ依リ同時ニ原裁判所
書記局ニ申立タル時ノ如キ此場

合ニ於テハ公訴ニ付テノ^控訴ヲ主トシテ
 民事原告人ノ控訴ヲ附帯ノ控訴
 トシ公訴私訴共ニ輕罪裁判可、於
 テ之ヲ審判ス可キモノニ可有之哉
 又ハ公私兩訴共ニ控訴期限内アルヲ
 以テ單ニ控訴ト稱ハ可然哉
 若シ被告人公訴ニ付テ^控訴ヲ為シ私訴
 ニ付テハ被告人及ヒ民事原告人ヨリ
 別段申立無之節ハ私訴ノニ確定
 シタルモノト相心得可然哉
 若シ果シテ然ラハ本案公訴ノ確定
 無之時向ハ私訴ニ付テ何特附帯ノ
 控訴アルヤモ難計ニ付其私訴^申



執行

ハ公訴本案確定マテ停止ス可
 キ義ト相心得可然哉

右ハ左ノ通

内訓

第二十四条 昨年第七十四号公布
 シ以テ刑事ニ關スル控訴^申サレザル
 ニ因テ指令ニ及ハス

出寄 始審裁判所判事 十五年二月廿四日
 四年七月十九日

第十三条 治罪法第三百四十七条第
 二項ニ照シ豫審判事會議局

ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言

渡アリタルモノハ別改檢察官ノ請

求テ俟タス其豫審判事若クハ

會議局ヨリ（上告期限
経過後）直クニ公判ニ付
タルモノナルヤ又ハ一應檢察官ノ手
ヲ經テ而シテ公判ニ送付スルモ
ノナルヤ

右ハ左ノ通

回答

第十三条 檢察官ヨリ公判ヲ
求ムヘキモノトス

熱田治安裁判所 十五年十月十日
日年十月二日 回答

第六條 治罪法第三百四十七條
第一項檢察官ノ請求ニ因リ書
記局ヨリ被告人ニ對シテ發シタル
呼出狀トアル呼出狀ハ書記ノ

名義ノニ用ニ發送スヘキ哉

右ハ左ノ通

回答

第六條 眞實解ノ通

宇和島始審裁判所判事外（十五年十月十日）

第六條 治罪法第三百四十七條第一項

檢察官ノ請求ニ依リ書記局ヨリ

被告人ニ對シテ發シタル呼出狀トアリ

右呼出狀發シタルノニテ以テ公

訴受理シタル者ナルヤ又ハ該執

行済ラ以テ公訴受理シタル者ト

相心得可然哉

右ハ左ノ通

指令

第十條 呼出状ヲ発シタルヲ以テ公訴ヲ受理シタル者トス

鹿野鳥輕罪裁判所檢事 十五年十月十九日同月廿日付

治罪法第百四十七條輕罪裁判所於

テハ左ノ条件ニ因テ公訴ヲ受理ス

一云々

二豫審判事輕罪裁判所會議局

又ハ上等ノ裁判所ノ判決ニ因リ其

事件ヲ移スノ言渡

本条ニ基キ左法第百二十六条ノ手

続ヲ考フルニ豫審判事ニ於テ輕罪

裁判所ニ移スノ言渡ヲ為シタルハ

一切ノ書類ハ豫審判事ヨリ直チニ

書記局ヘ交付スヘキモノノ如キ見解

ヲ生シ又同法第百六十条末項ニ基

キ考フルニ豫審判事ヨリ一切ノ書

類ヲ檢事ニ送り檢事ハ其言渡ノ

執行 公判ニ付ルノ手續ヲ為ス可キモノノ如キ見

解ヲ生ス爰ニ佛治罪法第百二十七

条ヲ閱スルニ(下吟味掛リ裁判役吟味ヲ

為シ終リタルハ直ニ其吟味ノ書類ヲ

檢事ニ送り檢事 應リテ三百日内ニ求刑ハ

書ヲ其裁判役ニ送ル可シ)トアリ

又實際ニ於テモ前段ノ如キ見解

ヲ以テ是トスルハ同法第百五十五

因リテ若シ原告人証人ヲ要スル時
其手續ヲ欠クノ支向アリ依テ前
段ノ如キ見解ハ非ニシテ後段ノ如
キ見解ハ是ナルカト思考ス得共
少シク疑義ヲ生シ矣其見解
ノ是非御明示有之度此段相
同矣也

右ハ先例ニ依リ左ノ通

指令

後段同ノ通但治罪法第百四
十七条ハ受理スヘキ条件ヲ定
ナタル迄ニテ書類往復ノ手續
ヲ示レタル者ニ非ス

浦和輕罪裁判所檢事

十五年十月廿四日
同 年同月十日

第三百四十九條

被告

第一条

罪金ノ刑ニ該ルヘキ者ハ

治罪

事件罰金ノ刑ニ該ル可

法第三百四十九條ヨリ代人ヲシテ公

キ時ハ代人ヲシテ出廷

廷ニ出頭セシムルイヲ得ヘキモ豫

マシムルイヲ得可キ旨

審判事又ハ檢事ニ於テ取調ヲ為

テ呼出状ニ記載ス可シ

スルハ代人ヲ許サシムル方相當ナラ

民事原告人及ヒ民事擔

シカ如何

当人ハ代人ヲシテ出廷

右ハ左ノ通

セシムルイヲ得

回答

第一条

四罰金ニ該ルヘキ者代

人ヲ出廷セシメ事結了スルヲ得

ヘキ者ハ必スシモ代人ヲ禁スルニ

及ハスト考量ス



小濱治安裁判所判事

十五年六月廿七日
全 年八月十六日付

第三百五十一條 第三

第六條

檢察官豫審ヲ專セサル事

百二十四條ノ規則ハ豫

審ヲ經サル輕罪事件ニ

件ト看認ノ公訴セシニ

扱リ之ヲ受理シ

審ヲ經サル輕罪事件ニ

モ亦之ヲ適用ス

宛廷シテ

審問スルニ豫審ス可キ條

モ亦之ヲ適用ス

モ亦之ヲ適用ス

件有之ハ

無論管轄始審廳豫

審判事ハ回送ス可キ哉

審判事ハ回送ス可キ哉

審判事ハ回送ス可キ哉

審判事ハ回送ス可キ哉

審判事ハ回送ス可キ哉

審判事ハ回送ス可キ哉

右ノ左ノ通

指令

第六條

伺ノ通

但治罪法第三百五十一條第三

百五十七條第一項ニ依リ如今

スルモ妨ケナシ

若松地審裁判所長判事十四年十一月廿六日 諸訓 第三百五十二條 檢察

治罪法第三百九十一條末項ニ被告人ノ白状ヲ官ハ裁判長ヨリ被告人

ノト至氏仍ホ其取調ヲ為サ、ル可カラストノノ氏名年齢職業住所及

明文之アリ候、共輕罪違警罪ノ公判ニハ右等ニ出生ノ地ヲ問ヒタル

ノ明文之ナキ上ハ輕罪違警罪ノ公判ニハ被告後被告事件ヲ陳述ニ可

人ノ白状アリタル時ハ必ズ其取調ヲ為サ、ルシ

モ苦シカラサルハ勿論ノ儀ト相心得可然哉 民事原告人ハ被害事件

右ハ重罪ハ事件重大ニ係ルヲ以テ治罪法第 三証明ニ可シ

三百九十一條ノ通告人ノ白状アリト至氏 調書又ハ申立書下ル時

仍ホ其取調ヲ為サ、ル可カラズ違警罪ハ至 小書記ヲシテ之ヲ朗讀

輕ノ罪ナルヲ以テ其白状アリハ第三百二十 七シメ次ニ原被証人ノ

九條ノ通他ノ証憑ヲ差出サシムルニ及ハサ 陳述ヲ聽キ且証拠物件

ルヲ本則トシ更ニ其取調ヲ為サ、ル但裁判所 三被告人ニ示シ弁解ヲ

ニ於テ之ヲ定立サシムルヲ得キモノトス輕
罪ハ其中間ニ在ルモノニシテ法律ニ於テハ
其取調ヲ為ス一キヤ否ヲ定メスト至モ禁錮
ノ刑ニ該ル一キモノハ可成其取調ヲ為スヲ
可ナリトス因テ左ノ通

内訓

輕罪遠警罪ノ被告人白狀アリタル時処分ノ儀
ニ付詰訓ノ趣輕罪ハ禁錮ノ刑ニ該ル一キモノ
ニ係ルハ仍ホ其取調ヲ為スヲ可トス遠警罪ハ
治罪法第三百二十九條ノ通

山田始審裁判所

十五年九月十日
月 年 月 日 回答

第五條 治罪法第三百五十二條ニ裁
判長云々トアリ 柳裁判長トハ裁判

官二名以上ニテ裁判スル中其上席人
ノ称呼ナラン果シテ然ラハ輕罪裁
判所ノ如キ判官一名ニテ裁判スルヲ
以テ裁判長タル者ハ無之義ト心得
ハキ者ナルカ

右ノ左ノ通

回答

第五條 判官一名ニテ裁判ス
ルヲ得ヘキ裁判所ト云モ猶ホ
裁判長ト称スヘキモノトス

新編裁判所新築田支廳詰檢事

十四年九月七日詰訓
十五年四月廿四日訓

第三十九條 治罪法第三百五十二條ヲ以テ
第三百八十八條以下及第三百九十六條

第三百九十八條等ヲ比較スルニ重軽ニ在テハ
 犯罪事實ノ弁論ニハ必ず裁判長弁論
 終結ノ言渡ヲ為シタル後檢察官法
 律適用ノ意見ヲ陳述スルカ如ク掲
 載有之モ輕罪ニハ裁判長弁論終結
 ノ言渡ヲ為ス可キノ明文無之候得共
 輕罪ニ在テハ別段弁論終結ノ言渡
 無之モ既ニ弁論尽キタリトスル場合
 ニ於テ被告人又ハ弁護人最終ノ発
 言アルニ於テ敢テ裁判長ニ告發ヲ要
 セス直ニ法律ノ適用ニ付意見ヲ
 陳述ス可キ儀ト相心得可然哉
 右ハ左ノ通

内訓

第二十九條 一應裁判官ニ告ケタル
 上ニテ意見ヲ陳述ス可シ

(理由) 輕罪ニ付テハ裁判官弁論

終結ノ言渡ヲ為サス因テ事實ノ
 弁論尽キタルニ於テハ檢察官一
 應裁判官ニ告ケ而後法律ノ適
 用ニ付意見ヲ陳述ス可キ者ト
 ス

福島始審裁判所判事 十五年十月十四日請訓
 同日 年月日北六内訓

治罪法第百五十二條第二項第百
 五十三條第二項第百九十九條第百
 四條第二項ニ民事事原告人公廷臨

陳述等ノ式之アリ矣。然已ニ民事原告
人ヨリ差出置タル処ノ書面ニ依リ事
明白ナル場合ニ於テハ更ニ出廷セシムル
ナリ。曩ニ差出シタル書面ヲ書記ニ
朗読セシメ民事原告人ノ陳述ニ換
ヘ可然哉。

右請訓ヲ案スルニ請訓書ニ列舉
セシ各条ハ陳述ノ順序ヲ定ナタル
ニ過キナレハ請訓ノ如ク取計ヲモ
誼条ニハ抵觸セサルヲ知リナルモ原
告人ニ對シテ呼出ヲ為サズニテ欠
席裁判ヲ為スニ當レハ故障等ノ規
則ニ差違音キ且刑事上ニ於テ自己

ノ費用ヲ以テスルニ非サレハ言渡
書謄本ヲ下付セサル者ナレハ原
告人ハ裁判アリシテ知ルニ由ナリ
旁不都合ヲ生スヘクト思考委員
左ノ通

内訓

民事原告人ノ義ニ付請訓ノ趣
事實明白ナル場合ト虽モ尚呼出ラ
為スヘキ義ト可心得

長野地審裁判所檢事

十五年十一月廿四日
同 年十二月六日付

輕罪ノ被告人又ハ其弁護人ヨリ訴訟
唇類ノ披閱或ハ謄寫ヲ請求セシハ
如何処分ス可キ乎治罪法中明文ナレ

大山

然レハ人民ノ権利及ヒ保護上ヨリ之レヲ
考察スレハ許ス可カラサルノ条理
ナキヲ以テ無論其請求ニ應ジ苦シ
カラス義相心得テ各裁判所
ノ処分區セニシテ許否一徹セサル
裁ニ相聞ヘテ付為念此段奉伺
至也

右ハ先例(相川治^安裁判所十五年十月八日請訓
同十五年十月十四日請訓)
ニ依リ左ノ通

指令

輕罪事件ノ弁護人訴訟書類ノ
圖說又ハ抄寫ヲ取出テタルハ許
可スヘキ義ト心得ヘシ

第三百五十四條 罰金
 ノ刑ニ該ル可キ被告人
 又ハ第二百六十九條ノ
 規則ニ從ヒ尺席裁判ヲ
 為スルヲ得可キ被告人
 其呼出ノ日時ニ出廷セ
 サル時ハ尺席裁判ヲ為
 ス可シ

仙臺裁判所判事

十三年十二月十日 詰訓
十四年七月廿三日 内訓

三十八日 第三百五十六條ノ一項ニ被告人豫

メ其事件ヲ申立タルト有ルハ公判ハ勿論豫審

中ニ於テ申立タル時ヲモ指示シタルモノカ或

ハ公判中ニ申立タル時ニ限レルヤ

右ハ公判ハ勿論豫審中ニ於テ申立タル時モ

指示シタルモノトス

内訓

第三十八條 第三百五十六條第一項豫ノ其事

件ヲ申立ツルトハ公判豫審中ニ拘ハラズ申立

タル事件ヲ云フ

第三百五十六條 下席

裁判ニ因リ禁錮ノ刑ノ

言渡ヲ受ケタル被告人

ハ左ノ場合ヲ除クノ外

刑ノ期滿免除ニ至ルマ

テ故障ヲ為スルヲ得

一被告人本案ノ裁判前

豫メ裁判ノ可キ事件

ヲ申立タル時

二裁判言渡書ヲ本人ニ

送達シタル時

三被告人裁判執行ニ因

リ刑ノ言渡アリタル

請
送
權

一ヲ知リタルノ証
ア
ル時

第一ノ場合ニ於テハ言
渡書ノ送達アリタルヨ
リ第二第三ノ場合ニ於
テハ言渡アリタルヲ
知リタルヨリ三日内ニ
故障ヲ為スヲ得

新瀉縣 十五年三月十日
全年全月廿八日付

第三百五十七條 裁判

第一條 治罪法第三百五十七條裁判所ニ於テ
 事實發見ノ為メ必要ナリトスル時ハ
 証人ヲ呼出シ鑑定人ヲ命ジ若シクハ
 臨檢ヲ為ス事ヲ得ル但シ是等ノ処分ヲ為スニ付テハ
 第三編第三章ニ定メタル規則ニ從フ
 有之該精
 神タルヤ公判ノ事ニ於テ事實發見ノ為メ要ス
 ル処分ニシテ治罪法第三編第三章中
 密室監禁ハ臨檢ヲ為ス事ヲ得ル但
 保釋等ヲ為ス事ヲ許サレタル譯之レ
 ナクヤ
 右ハ左ノ通

指令

テハ第三編第三章ニ定
メタル規則ニ從フ

第一條 公判ニ於テハ密室監禁ノ処分ヲ為ス
 事ヲ得ス但治罪法第二百十條以下ノ規則ニ從
 付テハ豫審判事ヲシテ

解釋ヲ許スルヲ得

第二條 豫審ヲ要セス公判ヲ求メタル事件ニ
付テモ前條同様ナルヤ

右ハ左ノ通

其指示スル所ノ條件ニ

付キ取調ヲ為シ且其報
告書ヲ差立ルハシムルヲ
得

指令

第二條 前條ニ因リ理會ス可シ

大津始審裁判所檢事

十五年十二月廿二日
同年四月二十日付

第二條 治罪法第三百五十七條ノ場

合。於テ事實充足ノ為メ呼出タル新

ナル証人トモ前條同様調書ヲ要

セス其臨檢ノ時。於テハ檢索官モ

立會ノ可キ者ト心得可然哉

右ハ左ノ通

指令

伺ノ通

但檢索官ノ立會ヲ必要トスルニ

非ナレハ必スシモ立會ヲ為スニ

及ス

新鴻裁判所新発田支廳詰検事

十四年九月七日
十五年四月廿七日

第三百五十八條

犯罪

第二十五條 治罪法三百五十八條之表

証憑充分ナラザル時

輕罪禁錮以上ニ訴ル被告又無罪

ハ裁判所ニ於テ無罪ノ

若クハ免訴ノ言渡ヲ為シタル場合

言渡ヲ為ス可シ

於テハ即時ニ放免之可キモノニ可相

又第二百二十四條第三

之款又ハ上訴期限内之ヲ拘置シ

以下ノ場合ニ於テハ免

裁判確定後放免ノ處分ニ及

訴ノ言渡ヲ為ス可シ

フ可キモノト相心得可然哉

本條ノ場合ニ於テ被告

右ハ左ノ通

内訓

人勾留ヲ受テタル時ハ

第二十五條 前段 是解ノ通

(理由) 先例ニ依ル

放免ノ言渡ヲ為ス可シ

宇和嶋始審裁判所判事

十四年十二月五日同
十五年二月十五日付

第三百六十条 被告事

第九條 治罪法第三百六十條。被告事件重罪	第十條 被告事件重罪
十條中ハ管轄邊ノ言渡ヲ為シ若シ豫審ヲ經サ	十條中ハ管轄邊ノ言渡ヲ為シ若シ豫審
ル中ハ豫審判事ニ送附スルノ言渡ヲ為ス可シ	ル中ハ豫審判事ニ送附スルノ言渡ヲ為
云々ト下リ同法第三百六十一條ニ被告事件豫	云々ト下リ同法第三百六十一條ニ被告事件豫
審ヲ經ケル中ハ之ヲ其裁判所ノ會議局ニ送付	審ヲ經ケル中ハ之ヲ其裁判所ノ會議局ニ送付
スルノ言渡ヲ為ス可シ會議局ニ於テハ第二百	スルノ言渡ヲ為ス可シ會議局ニ於テハ第二百
五十三條第二百五十五條ノ規則ニ從ヒ取調ヲ	五十三條第二百五十五條ノ規則ニ從ヒ取調ヲ
為シ被告ノ管轄裁判所ニ送付スルノ言渡ヲ為	為シ被告ノ管轄裁判所ニ送付スルノ言渡ヲ為
ス可シト下リ而シテ同法第三百三十六條及ヒ	ス可シト下リ而シテ同法第三百三十六條及ヒ
第二百五十二條ニ因シハ會議局ニ於テハ判事	第二百五十二條ニ因シハ會議局ニ於テハ判事
三名以上ニテ其判決ヲ為ス可キモノ。如シ果	三名以上ニテ其判決ヲ為ス可キモノ。如シ果
シテ然ラハ第三百六十一條ノ場合ヲ於テモ會	シテ然ラハ第三百六十一條ノ場合ヲ於テモ會

判事

議局。於テハ判事三名以上。テ其言渡ヲ為サ
ルヲ得。因テ思考スルニ此時公判々事一名
及ニ先。豫審ヲ為シテ判事一名。會議局ノ
判決ニ加ハ。ルヲ得。升レハ判事ノ復數都合
五名ヲ要ス。キ者ノ如シ然ルニ當裁判所ノ如
キハ裁判所長一人判事補四名。ニテ若シ一名
不参。時ハ會議局ヲ開ク。テ得。如何相心得
可然哉

但第二百五十三條第二百五十九條ノ場合會
議局。於テ取調シ余タル判事一名ハ會議局
全員中ヨリ之レヲ撰取スルヲ得。他ヨリ之
レヲ撰取致候哉若シ他ヨリ之レヲ撰取スル
儀ニ候得。輕罪裁判所判事ノ全員六名ヲ欠

ク可カラサレ儀ト相考候

右ハ左ノ通第一局會議

指令

第九條 前段同ノ通 後段一名不参シテ又員
マレハ其満員ヲ待テ會議局ヲ開ク儀ト心得
可シ

但書前段同ノ通

松山始審裁判所判事

十四年十一月廿六日
十五年五月五日
管内訓

第十八條 治罪法第三百六十條ノ場

合ニ於テ若シ治罪裁判所ニ係ル中ハ

其地ヲ管轄スル始審裁判所ノ豫

審判事ハ送付スルノ言渡ヲ為ス義

有之候哉



刑
法
編

刑
法
編

右、左ノ通

内訓

第十八条請訓ノ通

請
訓
ノ
通

請
訓
ノ
通

第三百六十一條 被告
 事件豫審ヲ経タル時ハ
 之ヲ其裁判所ノ會議局
 ニ送付スルノ言渡ヲ為
 ス可シ
 會議局ニ於テハ第二百
 五十三條第二百五十五
 條ノ規則ニ從ヒ取調ヲ
 為シ被告人ヲ管轄裁判
 所ニ送付スルノ言渡ヲ
 為ス可シ

仙臺裁判所判事

十三年十二月十日詰訓
十四年七月廿三日内訓

三十九二日 第三百六十二條新ナル証憑ト有

ルハ重罪ニ付テノ証憑ヲ指シタル者カ或ハ輕

罪タル可キノ証憑ヲ指シタル者カ

右ハ輕罪重罪ニ依ラズ其事件ニ付渡前ノ証

憑ノミニテ別既ナル証憑ヲ發見セサルトテ

云フ

内訓

第三十九條 輕重罪ノ區別ナク其事件ニ付別

既ノ証憑ヲ發見セサルトテ云フ

第三百六十二條 會議

局ノ言渡・因リ事件ヲ

受理シタル場合ニ於テ

新ナル証憑ヲ發見スル

トテシテ其事件ヲ重

罪ナリトスル時ハ管轄

邊ノ言渡ヲ為ス可シ

控事ハ大審院ニ裁判管

轄ヲ定ムルノ訴ヲ為ス

可シ

刑罰法

刑罰法

第三百六十三條 前二
條ノ場合ニ於テハ會議
局又ハ大審院ノ判決ヲ
ルマテ檢察官ノ請求ニ
因リ又ハ裁判所ノ職權
ヲ以テ被告人ヲ其裁判
ノ所^所監倉ニ留置スルノ言
渡ヲ為スルヲ得
又第二百十條以下ノ規
則ニ從ヒ保釋ニ付テ判
決ヲ為スルヲ得

刑
法
省

刑
法
省

前橋地審裁判所檢事

十五年十月八日何
年四月十七日付

第三百六十四條 被告

第六條 治罪法第百十條第百十
事件輕罪ニシテ且証憑

九條第百二十六條第百六十四條但
充分ナル時ハ法律ニ依

書等ノ場合ニ於テ豫審又ハ公判
ニ刑ノ言渡ヲ為ス可シ

ノ為シタル保釈或ハ責付中ノ被告
被告人禁錮ノ刑ノ言渡

人治安ヲ害スルノ所為
尚ホ犯罪ノ目的ニ達
シ身ハ証據ノ證據ニ因リヲ受ケタル時ハ当然保

アリト認
地方官ノ照會又司法
警察官ノ報告等ニ因リル中ハ檢事ハ
釋責付ヲ取消シタル者

豫審若クハ公判ニ事ハ保釈責付
トス但上訴中更ニ保釋

ノ取消ヲ請求シ得ルハ勿論上訴得
ヲ求ムルヲ得

可然分

右ハ左ノ通

指令

第六條 同ノ通

四号布告：抵觸セザル義ナクヤ

右ノ左ノ通

指令

本月十八日付電報伺ハ是迄ノ

通

宇和島地審裁判所判事

十四年三月廿四日
十五年二月十日付

第五條治罪法第三百三十八條第二

項治罪法第三百六十五條第三項ニ

民事原告人被告人及ヒ民事擔

当人ハ要償ニ付テリ言渡民事

治安
地審

裁判所ノ金額ヲ超過シタル時

地審
刑罰

裁判所ニ控訴スルコトヲ得ルト有之

未ダ民法須布不相成上ニ超過ノ

テノ言渡ヲ除クノ外

刑ノ言渡ヲ受テタル

時

三民事原告人被告人及

ヒ民事擔当人ハ要償

ニ付テリ言渡民事上

地審裁判所ノ終審ノ

金額ヲ超過シタル時

四檢察官其他訴訟關係

人ハ管轄逾越權擬律

ノ錯誤又ハ無効ノ記

載アル規則ニ背キタ

ル時

金額相分ラヌニ付右法律須布

相成マテ控訴スルコトヲ得ル儀

ニ候哉

右ノ左ノ通

指令

第五條 十四年第八十三号布

告ノ通

山口地審裁判所檢事

十五年一月十三日
同 年 日 月 六 日 付

治罪法中控訴ニ係ル條件ハ當定ス

分實施セザル旨御布告相成

ニ付テリ治罪法第三百六十五條ノ

場合ニ於テハ直テ大審院へ

上告スヘキ筋ナルヤ至急御

第七十四號 明治十四年
十二月廿八日

治罪法中刑事ノ控訴ニ

關スル條件ハ當分ノ内

實施セズ

右奉 勅旨布告候事

第八拾三號 明治十四年
十二月廿八日

治安裁判所及ヒ地審裁

判所ノ權限左ノ通制

定ス

右奉 勅旨布告候事

第一條 治安裁判所ハ

訴訟事件ヲ勸解

ス但諸官廳ニ對テ

指揮ヲ請フ

右審案スルニ控訴ヲ實施セ
スト定メラレタル治罪法ニ於テ
控訴ヲ許シタル者ハ總テ上告
ヲ許スニ非ラステ全ク治罪法
中刑事控訴ニ關スル條件ヲ
除去シタルモノトシハ上告ヲ爲
シ得可キ事柄ニハ毫モ其影
響ヲ及ホス者ニアラス故ニ上告
ヲ爲サントスル者ハ矢張治罪
法ノ規則ニ從ハサル可カラス
因テ左ノ通電報ヲ以テ御指
令相成可然哉

事件及ヒ商事係
リ急速ヲ要スル事
件ハ勸解スルノ限ニ
在ラス
第二條 治安裁判所
ハ請求ノ金額及ヒ價
額百圓未滿ノ訴訟
ニ付始審ノ裁判ヲ爲ス
第三條 治安裁判所
ハ人事其他金額見
積ル可カラサルモノ
ヲ裁判スルヲ得ス
第四條 始審裁判所

指令

刑事控訴實施セラシサレ
儀ニ付伺 趣ハ治罪法ニ於
テ上告ヲ許シタル場合ニア
ラサレハ上告スルヲ得ス

請求ノ金額及ヒ價額
百圓以上並ニ第三條ニ
掲ケタル治安裁判所
權外ノ訴訟ニ付始審
ノ裁判ヲ爲ス

第五條 始審裁判所
其管轄地内ノ治安裁
判所ノ始審裁判ニ
對スル控訴ニ付終審
ノ裁判ヲ爲ス

但控訴ノ手續ハ明
治十年第拾九號布告
控訴手續ニ照準ス

第三百六十六條 控訴

ハ裁判言渡アリタルヨ
リ五日以内ニ之ヲ為ス
ヲ得

又裁判ヲ受ケル者
ハ刑ノ期滿免除ニ至ル
マテ何時ニテモ故障ヲ
為サスシテ直キニ控訴
ヲ為スヲ得但第三百
五十六條ノ場合ニ於テ
ハ五日以内ニ之ヲ為ス可
シ

富山支廳檢事

十四年十二月廿日
十五年一月廿五日付

第三條

治罪法第三百六十七條公訴ノ裁判言

第三百六十七條

公訴

渡ニ對シ控訴アリタル場合被告人勾留ヲ受ケ

ノ裁判言渡ニ對シ控訴
アリタル場合ニ於テ被

タル中ハ檢察官之レヲ控訴裁判所ノ監倉ニ移

告人勾留ヲ受ケタル時

ニシトアリテ其監倉ニ移スハ檢事ノ擔當ス

ハ檢察官ヨリ之ヲ控訴

ル所ニシテ控訴ノ申立人タル中ト對手人タル

裁判所ノ監倉ニ移ス可

クト分々サル儀ニ可有之哉果シテ然ラハ檢

シ

察官控訴ノ申立人ニテ被告人ヲ送致シタル中

ハ敗訴ヲ受ケルト否トヲ問ハス其費用ハ治罪

法第三百七條第二項ニ於ル如ク官ニテ之ヲ擔

當ス可キモノト相心得可然哉

右審察候及第三條ハ昨十四年第七十四號布

告ノ通りナルヲ以テ左ノ通

指令

第三條 十四年第七十四號布告ノ通心得可シ

新潟裁判所新米田支廳詰檢事 高野九吉 請訓
十一年四月廿六日訓

第二十七條 治罪法身三百六十七條及ヒ
身三百三條ニ掲タル如リ民事擔
当人ニ於テ異議ノ申立アリタルニ付
其裁判所ニ於テ判決ヲ與ヘタル場
合ニ於テ此判決ヲ不服トシ控訴
シタル場合ニ於テハ本案ノ弁論
ヲ停止スルノコトヲ本條ニ掲ク
ル如ク留ラ受タル被告人ヲ控訴
裁判所監倉ヘ移ス、及ハサル議
ト相心得可然哉

又民事擔当人ノ控訴ハ單ニ私訴
ニ而已管スルモノニ付、通常民事
控訴ノ手續ヲ為シ控訴裁判所民
事局ニ於テ通常民事ノ規則ニ依テ
裁判ス可キモノト相心得可然哉

右ハ左ノ通

内訓

第二十七條 第一項請訓ノ通等
二項刑事局ニ於テ裁判スヘキ
者トス

(理由) 民事擔当人訴訟ノ關係スルニ付
異議ヲ生シ裁判所ニ於テ其判決ヲ
為スモ公訴ノ裁判言渡ニ非サルヲ以テ

其判決ニ對シ控訴スル者アルモ第
三百六十七條ニ定ムル如ク被告人ヲ
控訴裁判所監倉へ移スニ及
ルナリ

民事擔当人ノ控訴ハ單ニ私訴ニ
シテ關スルトモ通常純粹ノ民事ト
同シカラス公訴事件ニ附帶スル
ヲ以テ控訴裁判所刑事局ノ
管轄ニ可キ者トス

茨城縣

十四年十二月日
十五年四月七日

第三百七條 治罪法第三百六十
七條公訴裁判所ノ言渡ニ對
シ控訴アリタル片之ヲ控訴裁

判所ノ監倉ニ移スルハ已ニ法
文ニテ明ナレモ控訴裁判所ニ於
テ言渡ヲ為シタル片ハ之ヲ執行
セシムルカ爲メ原裁判所ニ送
致セシムルハキ義ニ可有之哉

右ノ左ノ通

指全

第 三十七條 明治十四年
第七十四号公布アリタル上最
早伺ノ疑義ナカル可シ

熊谷始審裁判所檢事

十五年六月廿五日同官
同日四月廿日同官

第三百六十八條 第三

私訴ノ上告ニ付始審裁判所檢

百三十九條ヨリ第三百

察官ニ於テ關係スルヲ得ヘキヤ

四十二條ヲテ及テ第三

否哉先般岡田檢事ヨリ御覽

百四十四條ノ規則ニ此

向ニ及候處右ニ治罪法第百

章ニモ亦之ヲ適用ス

貳拾條ニ依ル可キ者ニ付意見

アリハ之ヲ付スルヲ得ヘキ云

々御明示相成私訴ノ上告ニ

付テハ明ソシイタヒ候然ルニ昨

年第七十四号布告ヲ以テ治

罪法中刑事ノ控訴ニ関スル

條件ニ當分實施セヌ云々ト

アリハ爰論私訴ニ付テハ治罪

法第百四十四條第三項ニ照シ
第百六十五條第三項四項ノ
部分ノミテ控訴スルヲ得ルモノ
ト恩料ス果シテ然ラハ私訴
ノ控訴ニ付テハ他ニ明文ナキ
ヲ以テ始審裁判所檢察官
ニ切關係セサルモノト心得
可然哉

右ニ左ノ通

回答

私訴ノ控訴ニ付テモ檢
察官ハ治罪法第百六十
八條ニ依リ関與スヘキモノ

トス

第三百六十九條 輕罪
 裁判所檢事ノ控訴又ハ
 検事長ノ附帯ノ控訴ア
 リタル場合ニ於テ被告
 事件ヲ重罪ナリトスル
 時ハ第二百五十五條ノ
 規則ニ従テ會議局ニ於
 テ重罪裁判所ニ移スノ
 言渡ヲ為ス可シ

第三百七十條 控訴ノ
闕席裁判及ヒ其故障ニ
付テハ始審ノ闕席裁判
及ヒ其故障ニ付キ定メ
タル規則ニ從フ

高知裁判所長判事

十四年五月十八日 賞問 四答

第三百七十一條 檢察

第七條 控訴裁判所。於ラ為シタル輕罪裁判所ノ始審裁判ニ對スル控訴裁判ニ付檢察長ニ於ラハ法章ニ目ラ上告ヲ為スヲ得ルノ明文無之治罪法第三百七十一條ニ檢察官其他訴訟關係人ハ輕罪裁判所ノ終審ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ為スヲ得ルトアルハ輕罪公判ノ部款中ニ登記有之是レニ由テ之ヲ觀レハ獨リ輕罪裁判所檢察官ノ任スル義ト心得可然哉抑亦控訴裁判所ノ副席裁判言渡ニ對スル上告ハ何レノ檢察官ニ於テ任ス可キ義ニ候哉法章ニ明文無之重罪公判ノ部款ヲ閱スルニ治罪法第四百六條ニ欠席裁判ニ係ル刑ノ言渡ニ對シテハ

官其他訴訟關係人ハ輕罪裁判ノ終審ノ對審裁判言渡及ニ控訴裁判所ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ為スヲ得

